当直医の診察結果は、誤嚥性肺炎。
この年の1月18日（日）、同病院退院から8ヶ月目の再入院だった。幸い、主治医は、前回にもお世話になった信田（しのだ）みすみ女医長さん。
入院の翌29日（火）早朝、38度2分の熱が、11時には36・6度まで下がった。また、肩で息する状態もなくなった。
ヤレヤレー　ほっと一息ついた感じ。
午後からの主治医の説明は、
「誤嚥性肺炎でここ1週間が山です。重症です。」
「意識はありますか？」
の質問には、
「高熱がつづいているために反応が弱くなっている。」
との答えだった。
京都桂病院から自宅に帰って3日間、この間、ずーっと高熱がつづいていた。が、9月30日（水）10時の熱は、36度8分。瞬間、久しぶりの開眼、「パパ」を認識したように思えた。

（49日ぶりにわが家へ）

この病院では、週2回のシャワーとパジャマの着替えは3日に1回。
また、病状安定までの2～3日置に、「検査詳細情報」が手渡された。これで、病状変化の状況がよく分かって安心だった。たとえば、入院当日の28日（月）の白血球数は9600もあった。が、一週間後の10月5日（月）の数値は、6600で上限値を大きく下回っていた。
済生会病院での治療は40日間つづいた。
11月16日（月）午後2時、主治医はじめおおぜいの看護師さん達に見送られて退院した。
死線を越えて、再び、珠玉の日々が帰ってきた。
はからずも、2015年秋は二つの病院をハシゴした。
病院にもおもてなしの心の厚い病院と、そうでもない病院と、いろいろあることを経験することになった。それは、低医療費政策による重圧を患者へのしわ寄せで乗り切ろうとするのか、それとも、患者に寄り添いなが